

自然再生型農業「えんたのれんこん」

1年の集大成

穫収コンレンいー長

鳴門のハス畑に家族連れ50人



泥まみれになりながらレンコンを掘り出す参加者ら＝鳴門市大津町

鳴門市大津町のハス畑で、生き物と共生しながら農家の人たちと一緒にレンコンの種

付けから収穫までを体験しよう、と始めた自然再生型農業プロジェクト「えんたのれん

こん」に30日、約50人が集まった。

この日は1年間のプロジェクトの集大成。家族連れらが水を抜いた畑に入り、泥に足をとられながら熊手で掘った。悪戦苦闘して、顔を出したレンコンをそっと引き抜くと、「あわー。長い」と大喜び。笑顔は泥だらけだった。収穫後には地元の人たちが振る舞った魚介類や「うずしお汁」を堪能した。

周辺地域は、環境省のレッドデータブックで絶滅危惧ⅠB類に指定されているカワバタモロコや県の絶滅危惧Ⅰ類に登録されているミスアオイといった貴重な魚や植物が多い。これらは「農家が維持管理をしてきたおかげで地域の

環境が守られた。それをみんなに知ってもらいたい」と、今年からこのプロジェクトを立ち上げた徳島大環境防災研究センター特任助教の田代優秋さんはいう。活動は、単なる農業体験ではなく、農作業を通して生き物のすむ環境を再生することを目指している。

5月から地元の県指導農業士斎藤倫子さんの協力で水路で泳ぐメダカをハス田に導く魚道をつくり、水路の泥上げや水草刈りをしてきた。かなりの魚がハス畑で生息していることも確認できた。参加は口コミで広がった。その一人、ジュニア野菜ソムリエでフルーツトマトをレストランに卸している島村祚津夫さん＝徳島市住吉6丁目＝は「自然を楽しめて面白かった。手間ひまかけ栽培しているこ

とも実感した。素材を大切に使うことを伝えるのも私たちの仕事とと思っている」と話す。

昔、米の収穫難の時代に収穫量を多くするために水路と水田の間に半水没した「縁田」があった。今はもうないが、今度はハス田が人と人をつなぐ「縁のある田」になってほしいという願いから「えんたのれんこん」と名づけられた。